



ムカシの競馬を読む



すだ たかお 須田 鷹雄

1970年生東京生まれ。競馬ライター。サラブレッド、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

今から10年前、平成16年の7月という、アドマイヤグルーヴがマイメイドSを制した月……のだが、そう言われてもピンと来ない人が多いだろう。チアズブライトリーが七夕賞を勝ったとか、クラフトワークが函館記念を勝ったなどといったも同様である。

しかし、「いつの間になくなったアレ」が始まった年というところ、ピンとくる人もいるはずだ。平成16年7月19日付の東京スポーツから引用しよう。

「売り上げ回復の起爆剤となるのか？ 第1Rの発走時間を1時間繰り下げ、他場の全レース終了後に第11、12Rを組んだ『はくぼ開催』が17日の2回函館からスタートした」

そう、はくぼ競馬は10年前に始まったのだ。また最近のもののように思えるが、10年ひと昔、と呼べるだけの古さである。

メインレースに負けた後でもま

だ打てるレースがたくさんある、というのには精神的に良いような気も

したが、のべ時間が長くなるので勘弁してほしいというファンもいて、そのあたりは好みというものだろう。

このはくぼ導入初日は、函館最終レースの売り上げが前年の1.5倍になったそうで、珍しさからファンが食いついていた様子が見てとれる。

この年のはくぼ開催はなかなか好評で、翌年には小倉などにも広がった。転機が訪れたのは2011年。東日本大震災に伴う節電要請で、開催時間帯を伸ばすことになるのはくぼ開催の継続は難しくな

つたのである。もつとも、追加経費と売り上げの伸びを比べるとJRAにとつても死守しなければならぬ企画ではなかったようで、止めるきっかけとしてちょうどよかったのかも

れない。

はくぼ中止の副次的な効果は地方競馬にも及んでいる。あのままはくぼが続いていたら、高知や帯広

といった土日場がかつナイターという競馬場は、いまほど売り上げを維持できなかったはずだ。そう考えると、誰も損をしないところに落ち着いた感がある。

7月といえばセレクトセール。季節でもある。10年前のセレクトセールでは当時の日本記録が生まれていた。7月13日付のサンスポから。

「今年も『アノ男』がビッグドリームを買った。上場番号68番、『エアグルーヴの2004』。父はサンデーサイレンス産駒の菊花賞馬ダンスインザダークで、開幕前から誰もが注目していた鹿毛の男馬だ」

この馬の価格は4億9000万円、サンゼウスを抜き当時のセール価格日本記録(後にディナシーが更新)。購買したのは名物男・関口房朗氏。サンデーサイレンス直仔がいなくなった世代でどうなるか注目されたが、やはりセレクトセールにはこういう馬や購買者が登場

するのだ。

お分かりとは思いますが、この馬は後にテレビ番組の企画でサンデーサイチと名付けられる。準オープンで連対するところまで頑張ったが、オープンには上がれなかった。

いや、また可能性はある。同馬は今でも現役。10年前に当歳ということは今年10歳なわけだが、馬主こそ林進氏に変わったものの、まだ松田国英厩舎に籍がある。今年1月には京都の寿Sに出走した。

それにしても競馬界の栄枯盛衰とは激しいものである。10年前に「予算は無限定」と言っていた関口氏も、今では名義の出ている所有馬が中央からいなくなった。地方には昨年までいたが、こちらもいなくなったようだ。

続いて20年前、平成6年の7月から同じくセリの話題を御紹介しよう。まだセレクトセールは無い時代、ハイエンド市場であった「2歳(現表記1歳)7月特別市場」に上

ムカシ の馬 を 読む

平成16年・阪神競馬場
マーメイドステークス
優勝馬：アドマイヤグルーヴ

© JRA



場された、ダンシングブレーヴ×マックスビューティの牡馬である。先に言ってしまうと後の馬名はチヨウカイライジン。セリでは「一声落札」で予想より安い1億100万円だったが、最終的に1億7000万円以上の賞金を稼いだから良い買い物であった。

面白いのは当時の報道である。今、だといろいろ気を遣うのだろうが、当時はそうでもない。平成16年7月5日の日刊スポーツは、「前略」日本軽種馬協会所有馬ダンシングブレーヴの牡駒はかつてのテスコボーイやトウショウボーイの子同様にセリに上場する義務がある。このような良血馬はセリ以前に買い手が決まっている場合が多いが、今回は生産者の酒井公平氏が日高軽種馬農協の理事を務めている関係もあり、当歳時からセリに出すことを決めていた」と記事にしている。正しい措置をしているのだから報じて問題はないのだが、「このような良血馬は……」の件はいまの新聞だと書かないだろう。当時として「サンゼウスをディस्टてんのか」という話である。

20年前からもうひとつ、こちらは地方競馬の話。以前荒尾競馬の馬とり違いを御紹介したことがあるが、宇都宮でも同様のケースがあった。30日付の中日スポーツ

から。

「昨年6月、宇都宮市西川田の宇都宮競馬場で行われたサラブレッドB級レースに登録馬ではないC級の馬が入れ違って出走していたことが分かり、農水省は29日、主催者の栃木県に対して30日から10日間の競馬開催停止の処分をした。これにより、同競馬では8月6日から予定されている開催が3日間中止となる」

荒尾のケースは放牧地から兵庫の馬が入ってきてそのままバスしてしまったものだったが、こちらは同一厩舎内での取り違えだ。A馬をB馬と誤認して装鞍所に連れていき、特徴検査をパスしてしまった。この日はそのまま出走して負けてきた（なにしろ格下馬なので）のだが、後日B馬を「A馬です」と連れていつてこちらで発覚した次第である。「ならば前回の馬は……」となったわけだ。

検査する立場の職員も怠慢といえは怠慢だが、同一厩舎内で馬を取り違えるとは、厩舎もだいたい雑な話だ。廃止場というのはそれなりの理由もあつたのか……という気もしくはない。

最後に30年前、昭和59年の7月。競馬史に残るような話ではないのだが、昔よくあつたねというような事件。7月4日付の大阪新聞

から。

「もうすぐ妻と離婚する。その時は一緒にしろう」そんな男の甘い言葉にだまされ続けて20年間も『日陰の女』に徹し、あげくのはては男のために会社の小切手や約束手形など約3億円分を横領して、せつせと貢いでいた独身中年OLが、このほど大阪府警捜査2課と曽根崎署に、貢がせた男ともども逮捕された。この男は以前女が勤めていた繊維会社社長の御曹司。ところがその会社がつぶれ、男は借金に追われる身に。そこで『あの人のために』と女は4年間にわたり犯行を重ねていたのだが、男のほうはというとその金で競走馬まで買っていたという」

別に競馬は悪くないですよ、という話なのだが新聞は「馬を買っていたのに食いつき、中央の馬主資格を持つていたことや馬の値段、調教師や生産者のコメントまで取っている。ちなみに記事のヒントから調べてみると、プロント×ヒローウイングという血統の牝馬だつたようだ。

当時はステレオタイプとも言える事件だが、最近はまだありこういふ事件を見なくなった。見なくなったといえ、この記事の見出しが「中年男に3億円貢いだハイミス」。

……ハイミスという言葉も30年の間にすっかり死語である。